**「」によせて**

　報恩講の季節を迎えましたが、いまだ新型コロナウイルスの収束に見通しが立ちませんので、お寺の報恩講法座も中止せざるを得ないところもあるのではないでしょうかそうした中、改めて「報恩」について考えてみましょう。。

　「報恩」とは「恩にいる」と読みますが、その「恩」は阿弥陀如来のご恩を意味することは言うまでもありません。「恩」という漢字は「因」と「心」で出来上がっています。すなわち、「恩」には原因を考える心が同居しているといってもよいでしょう。

　親鸞聖人の「」の最初におかれているに、

　　のとなへつつ

信心まことにうるひとは

　　のつねにして

報ずるおもひあり

とえられた一首があります。信心のが開かれた人は「憶念の心」がいつまでも続き、それが報恩感謝のいになると示されています。人は歳を重ねるごとに記憶力が低下していくにもかかわらず、なぜこのような表現がされているのでしょうか。

　私が勤務していた中央仏教学院は、京都市右京区にある本願寺派の僧侶を養成する教育施設ですが、親元を離れて単身生活を始める学生が多くを占めていました。入学当初は、その寂しさ・孤独感から故郷を思い、親を慕う気持ちが人一倍強くあったと想像できますが、しばらくして環境にも慣れ、友人もできますと当然のことながら親のことを考える時間は減少していきます。しかし、そうかといって親のことを忘れたわけではありません。平素はいつも、親が故郷に元気でいてくれるという、いわば無意識の安ど感が京都での生活をしっかりと支え、充実させていることは確かです。

　それと同じように、信心のが開かれている人には、いつもいつも阿弥陀如来のことを意識しっていなくても、ちょうど親をう子どものように、気づかない心の奥底で阿弥陀如来のはたらきを忘れかけない心がそなわり、それが人生を送る上での安堵感と如来への報恩謝徳につながっているのです。

　今夏、テレビで「半沢直樹」という視聴率３０％を超える番組が放映されました。その中で「倍返し」とか「恩返し」という言葉が使われていましたが報恩の「恩」は返すものではありません。親への恩を示した言葉として、「孝行したいときに親はなし」ということわざがあります。また、「親孝行したいと思う心に孝行なし」という言葉を聞いたこともあります。本当の孝行は、自分で意識的にしようと思ってできるものではありません。

　今年の6月に母親が往生しました。９９歳でしたが、母親に叱られたという記憶がないほど、人一倍優しい母親でしたので、そのが今でも頭に浮かんできます。母親は嫁いだ後、病気のため足が不自由な身になりましたが、門信徒への法要の案内を一軒ずつ歩いて配るなど、辛抱強い性格と誰でも気楽にお付き合いする人柄で、長年にわたり、お寺を盛り立ててくれました。また６０歳半ばでの長女（私の姉）に先立たれるなど、その苦悩は計り知れないものがありました。「人が憂うて優しさができあがる」という言葉が語るように、苦悩がそのまま母親の優しさに繋がっていったように思われます。

　学院を退任するまでの最後の約１０年は、新幹線で京都と自坊のある三原（広島県）との往復を毎週続けていましたが、タクシーで最寄りの駅へ向かう時には、タクシーが家を出る最後までいつも手を振って見送ってくれました。まさに子を思う母親の気持ちを思い知らされました。今となっては「母の生存中に、あれもしてあげればよかった。これもしてあげればよかった。もう少し親の気持ちを考えてあげればよかった」というの心が蘇ります。

　阿弥陀如来へのご恩も同じことです。有名な「」には阿弥陀如来への報恩謝徳のいが、

の恩徳は

身をにしても報ずべし

知識の恩徳も

ほねをくだきても謝すべし

とされています。「身を粉にしても」、「ほねをくだきても」の言葉は、苦悩のただ中にあって、そこから抜け出す手立てを何一つ持ち合わせていない煩悩だらけの自分であったために（原因）、阿弥陀如来は救わずにはおれなかったと知らされた「心」を、報じても謝してもなお尽くしきれるものではない報恩謝徳の念いとして表現されたのです。　自分ほどで賢いものはないと思うな心に、どうして他者への報謝の心が湧いてくるでしょうか。じぶんのありのままのに気付き、それをするで報恩講をむかえたいものです。